撰集抄第二目録

一 攝州山居僧願書往生事
二 遁世上人事
三 見佛上人事
四 都多借衆事
五 攝州竹田居士往生事
六 秋釈聖人往生事
七 三井寺学徒滅後善提院事
八 寶日上人事
九 瞻西聖人事

村田
淵文庫
西乃記

撰集抄第二目録　畢

撰集抄第二

一　播磨別山居僧頌書堂事

播磨国にと聞こえしかたに、ある人の、そこらの所作者なりしぐ、
人をかたらひて、山の中にたづねまかりぬ。山中とは、
求めて、業をいとなみけり。木の根を枕とし、
草をとりて、かりそめの屋をつくり、
ぬぎすてたる法衣、墨さ衣ばかりぞ、僧の死てはべりしぐ、
のまてさまざまとなりぬ。見るごとに、さこそ、
かなしかりしかば、硯をぬぎすてて、
うたをつけはべりぬ。

死まえの死まの物ず。年来宮静の
と。書しりと詠り侍りけれど。墓の人為もて。みる
事もなくてやこ侍りしと。侍りさ。ひろう人すて
ひまそうりゆん。遊て。新歌侍り。石の海に隠れし
て。炭のおれる思ひます。猛傷ふらそ。ぶ生の法
より侍りあすこ。ん。唐ゆんどい祇さび。みるあうこ。き
様よ月くろるれど。年強くろふして何とて寿の
分と。ゆるまざを侍りやうんと。ん若くえく
侍り。まる死を生死よあうず。まを去を見に侍り
ざりん。心の中風ろさなくずこ。ひり侍てゆう
の雅様なるは。世の未あすん雅ろるへ。なる人き

侍りそれにかるずしこさに侍りまずさすや。小野山
のまび人の積ゆう人て。帰てのまそうりの事ちど
と。侍て実侍りふい。産様の積ハ中く前時ちはや
侍りんと。ておて侍りあるん。きかりの事の形。
硯より。すは。行を持ざり。ゆん。をりて。えて
侍り。世代遍くく人の。ふ。ちるぐ。ふ侍まどり。海の
ひくり。海山の。ひ。ふ。よ海山。くも侍まども。
持面ていは。一。ふ。すろ。瓶のりりがくふ。獨侍
の山のすまひをかるひぐくして世みりそう形。
詮を侍代は。頑打のひのどるもぐきふ。そ
侍まなりくは代とむべきあすはなりう。

除く思ふ所なくて侍り。抑なほ東富籠なりしへ何の
富籠でやおはします去るりとも何れ物とり侍りけん。

二 遁西上人の事

遁西上人は大納言如道卿の弟なり。法の
くらゐ高くもつぬ法師の身なれども
いとをれば大納言の禍にて思ひ出ずれば事かなし法師
い僧の下ふこそ侍るべくなれば見るべき法師
侍りんとこそやはんべれ。さてもあるべきこと
の法師侍りあり。猿樂くいとくして芸につ
あて面まで侍りけれども面の人形を屏とぞ者者
ふあるべき能をなるべきなれども法師のなつかしく。

反ありもいとくく系樂さ物ぞきて
物ぞさるやうあるべくこそ侍べ。
やはれと後ん給なくうるひとりがくすべ事
くはるり侍るべ人あやしくて安ぐ代くこそ
まやはと侍るべ物をくずすべを尺さるるべ。煩し
きまして法し合侍りべ大納言は事とりも変侍べ。
みこうる組たまはすとて侍べくなし
つくぞは変はかしあ。実ぞすし。能く師合わ
強つあれば僧を長て元侍りべ後人を目と
侍て尺侍るべは僧隊と何て門りかざ法へ主物
とべつかくまはる侍りべれば法勝寺の数べ。法ふ

をくうの西げかう乞食しよきものはめぐさらいて我方
いくへ合うの猫ゞりきて海り者りぱ人あうもせう
人間をめぐるかゆの給て色ゞさ大納言よはよ一我ゆ
えてうりぞう後いよ一あう人ゆうそて日法ゆ仏法
ぞ愛も色くあげ。今をしてゆ一ゆくれで世に
をゆいなく思さり者うゝ。二うるありて。うるあゆ山やう
ゆう給てうり。愛より給くゝ。皆人くゝ合給へうり者
まゞぱゆ。ゆ人ゝ給ぞ愛ゝふうり。僧うせくゝ後。
ゆ日ぞうり愛て。大納言寿後乃西ゆ撰り給て。
冷泉中納言後悪ゝうへ人よなん合給くぱゞして
若ゆ後て。ゝ乃御威よ部りゆうんとあげして。あ

年乃ゝ代歌給者うぱ。ゆうゝ日乃ゝ年ゆ。ゆうゝ一給者
ゝ。ゝ乃煩給へう寿ぱ。ゆうゝ一給て。
水乃面ゆまう白雲ゝ。ゝなゝ。ゝ人給ゝゆ
恨ゆ歌ゝ。ゝゆ月ゆ給ぱゝ乃ゝ雲給ゝ月ゆ
と後て。ゆゝうり給者うゝ。ゝと種ゝ引菊て。誰人今ゝと
ゆすんぱ。日法乃ゝうゝゆ。給ゝ。ゝ給ゝ乃ゝ
ぱ。海部ゝ乃道西ゝて。ゝん。ゝうゝ給ゝ
給ゝ。ゝ人ゝ給ゝて。ゝ給ゝ。ゝ給ゝ者ゝ
何を給。名ゝ。ゆ。ゝゝ給ゝ。ゝ給ゝ
名ゝ給ゝ。ゝ給ゝ。ゝ給ゝ。ゝ給ゝ
ゝ給ゝ。ゝ給ゝ。ゝ給ゝ。ゝ給ゝ

ふぶきに人は道をうしなひ侍りぬ。海山数すはるかに
やまそこなとわたりへどの事ハ身をなすべきやうもなく
て命をいとをしむべきかはらく侍る。後鳥羽の院ハ
言の葉をもて金葉和歌集をつくり給ひ侍るに。
中くにつゝをかくしをきて及ばずとやうしくまく波
をうてで見しく侍るべき蛭の子をもとるべきやうを
うりあんいとくしく身をこそ
ふ事ありけれ生とし生ける物ハ
屋敷をのこしわざりあり。我をもあ百よ劫入海の
獄しまいて妙人四位おとろかするぶ四ちる玄賓僧
都のひさかりを移る封雀すてを侍りなんとの拾風

ふなりこ式をしてぶくと作りぐ多。りり四代重よりの代
初りふ諸屋敷としていあり。海乃家ふを海りあんん。
奥しなりてぶくまびりんの味をを海ー きん語と
まていわりれをあひて九条八重ハ重よいるさ。半と成
くいられ世の事とかりて。欲きれまりの時をおりりり
りんまてハ浪らをまりの物よりのず。皆ひとしく
四代奥しぶく。見又ちりりりと強て四代
部ー。四代ぶくー。拾風りあと幡ー人りりさ
をりしぶす恩涸海さまを。家い妻会ちりりぶ
き。又冊りてをありあんち。りあれなりまりこよりて
ぶくりりんいりりくーくあ海りの代事ふこをりるし。

かつめんとそびしるすまさなく齋藤と表し尼
法の師歓迎大師の法息法やう面く彼ドもろいなりハ
ー。まとるべりつとて。いろうろ来ーやん皆人乃ぱ
理法で知なくぷうは思いぬそそよ。乞乞もこ世の仏
生。法師のうち法ぐき。人とこもむろいと面ろうて。実の
縁の恵と。善くなどこー於人。悪の分適ー人男りも
生ゆの時。いろかこ勤い拙墓ってもそんさて思せれ
ろ来ハ生ぐ流実。生乃業ときたし。法く集て。
首乃五戒十善の程とご行来なーろーてぬろ来ー
どろひてこ甲斐なー。実ーはいろひさめりん罪て来
毒乃ごくくみして。面い見と来やこ来ーろやー。

恵日しいろ別ハ求むべいろず。我い見なり。恵日の
ぬろるぐくなろ不ありぐ。ぬぐ道会の一門ろりされで
道いと教さば。ぐ始ろりはく集毛ろ罪乃。さなぐ
皆濁ぐ。ぬ有常住の月と。腸乃中ハす面さん来。
実いちまされあ法。ぬ乃月をむるべ。三波波風。
塗毛なろ。西法すて法ろうるべー。さて迎西上人へつ
ぬハ長ぐ。ろて。法ぬと教法ろハ。迷ハ入ろ法ろ
ハー。ぐ。ぬ中ハ方なく。ぐくくこ。雪ハ。
毛来ーとる。法のりま書作り義。今又書毛ろと。法
乃ぬ不海剛て。ぬ法ぬ法ぬ法

[illegible]

三 見佛上人事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十日ばかりすぎてもむるりの毛猛は何をもちはやしぎ
との給ひしかの清猛くてい見給へ人とやまし給ふ人
乃此事にそそがるべきなくさくさ我代に西行ふ
ものかはしくやはらぎ給へらべ行ろ人ありとやまし乃
給ひ給りきさてを給ひ給ふべきかはしらべ春の美
へ給へしうどもの乃前はなかど同よてまつりて清く給
さり給ふさかりさかはるさかはるべ熊田の乃ちち
どもくはらの人なるまのりて。後の書かに二月ばかりをみて
給ふさかはまりかはりの乃いとく為まりたりて書の
乃人者へさかへさべきあをとりずはかしそば杉後はの
つきさ後をば給へ〳〵寄あるべきとおりり

捨てをれし海山と後てをろぐく給へのさうひまてい
まそりてわ風よ住ていとく思ふすりろ後
かすめろふとあへひ給ものん猛いとかさだくわかえ
給りきかかはさぐろ人をけろ命と助ろてふ
もあへら人給へてが十日の間ずと後てわろへもんの
内ぬはやさはなすへぶくを掛風は給せめて数多乃猛いろ
ぐせんをの乃空のそへ後乃雪の岩風のさまは井。男ひ
風へまてへずぐ後よ後の老ごろなかかはりへるれど
人乃間ふとぐへなぐ。ふ氏風ぶりまてかかろへん。
遍ふろ氏人なども。世氏遍を給て間なるるなどふ。
猛ハなへひなろそへふ多乃まぐりかかはりと後と

たちこめたれば、ちりくもりてふるまづくもおびただしくかんなりて、
風はげしくふきて、ときてぞ人をなげさの溪風に、儀ふるあ
さの衣乃袖ぬらすなくすこと、なんぬるなれば、あはれ。
ちりそうそうぞ。君をなげ、なんぬるなれば、あはれ。
むしろ。乃本の人をなりあり。杉浦ふ伝ー注ふを。
上の弓張乃十日の夜乃月。我ー失ふ。あーくぶ。紙の
登乃岩屋ふ住ふ。ふまあそこ。表ふくく伝。失ふ
屋乃夜ハ。乃本の寺ふ。ふくく伝。あなり。月ごく
ふあるまぎなんぬれどいまだ杉浦ふ伝ー注ふを。
子を伝ふ杉浦ふ。

四 静園僧奉

乃ふ。杉浦園住者乃社の社司ふをふ。伝ー
ふ。杉浦ふ伝ー。杉浦ふ。ふまいふ伝ー。
杉浦ふをあるまりくふくく伝ー。ふ。
詠ふてうまそうあんぬ。ふ。道ふ。
ふ。ー人とふ。ふ。ふ。ふ。
多く伝ー。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふ。ふまりく。鈴とふ。ふ。ふ。
伝ー。ふ。天鈴山乃静園僧奉。ふ。自ふ。
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
いふふとかるくふて。ふ。ふ。
方へ海ふ伝ふ。ふ。ふ。ふ。

さ海へ参り給ひぬまでぞ誰れも人間るりん所よりなく。静
りきもく侍らんと思ふ。庵さ所を侍くく海ろう侍
ぬ。さて人をなれ打の根ふ。ともふ屋すこ侍く。
静の舞の袖の振。動しぬ山のかさ海ふすこあてゝおぢ
きなくいりまでうかりらんとおりひくぶらをへわさ
つゝ程ふ。ら後ハ道のもちあるゞゝてかへゝまゝ
しかりけまでゞ。ろくくちさせゝまゝん事ぬしさに。
かく御身とそそりぬまさてもたゝの大相ふのわさ
つまふ。ふ事う侍ふ。よふをいぶせゝらそ侍まぢくば
侍となくみう月をけゝまゝきふ侍りなく。疲ゝんり
なゝずおりゝ侍まゞ文の事を聞ますりくく侍ろゝと

て。所ゝらくくあり。屋侍くかるゝすと侍りゝしゝるば。
歌うふ。ふまのめて。行ふ別まを侍ふ。日乃山のとふふふく
行ふもふ。行ふく。芋ふやおそれとの侍ハせゝ
事ふ行ゝくふふ。ふりて侍ゝず。鄙さハ。ふ行ふ事あこ
そそ思侍ゝとゞゝやゝてゝ疲ハ居あゝぬまゞ。
歩ふむふくくてやゝ侍ぬ。て後ふ里とるんゝふ。
侍ゝかゞゝふりりて侍ゝず。ハ静。侍奉へふ。恵
僧正の考ふ。大宮の天御。侍通乃素の作ふまゝゝ多
くくりゝゝ神南ふ。世代のゞくゝ乃源てさる
ゞ見所の思ふゝと見ゝく。常ゝ義侍ゝとなんん
侍ゝ行侍ゝ。ふのふけゝて。早く世代様ゝゝ。

いまさかりけるやうにて、ものくさ侍るにぞ、ものくさ、
侍るもおぼえぬ事にて、あるこゝろ、ものくさ、
らばくるゝ、とゝ過くるもいとゝ侍りさてすて侍る
世をりとゝさげ〳〵いまくおもひ〳〵侍るに
年のこゝろおぼえよそれ捨ぬ道あり。唐
の都の恵鍛の八千里隔る境よりもとくめやしれ深よ
やうにて、三年ばかりくい侍るに、此国の人飛ぶ
き形〳〵ばくぐ〳〵しのまゝとなんも侍へり。是落涙と
うてかひなく〳〵とゝく物侍りぬ。あふ物いとめさ感あさ
む程よ。羅。さうざふやは侍べきとぞ侍へ
うりまうの物〳〵やう。今更山とゝを離れ侍あり。

世と秋風は吹そめ侍ん。すゞ涙よりおぼえ侍るくを侍
アとゝ侍思ふよ。蓬の額よ根と離れる草。はのかたちに
けるかぎる新よりめぐらず。さ分いまふを常の風のふ
さ来ていとゝもなく。船のこれ第のまふを
ぞれぬさるふ。蓬付べき方とこらへ侍べきうてあ
アとゝはりて〳〵只静かに侍へ。蓬の根と離りいふ
思ひめて〳〵て。は振舞とゝべきふこそ〳〵侍り。

五

攘別竹異石資の事

むり攘麿ふ竹の異とゝ有よ。唐侍て行戸侍り。
なれ宮の接女すてゝ侍りけるうかんめさ感ゝ
らばりけるや。酩酊中納言顕基ふ被面もりりく。

一とせの霜部ゆきんすと海り侍るつゞいの。なを。華が
侍りてんすきあられなまりて。雪ふかりて後。人も拾
女乃ゆくまひなどゝ作ばゝ侍るとゝや。節時中納
言代内乃人の舟よ。雪ふ。おより拾ぶ。海へ行侍ると
伺乃人て。簪と切て。陸奥ふ紙よ。記さきゝそ。かく書さり
ゆ。ゆ。ゆ。

法華経をなん心にかけ侍りしかば、ある時、今はの心ぼそさ、世代経ぬれば、そのまゝかくこめて思ひ入れ侍りしとくも侍りしかば、

六　親鸞聖人往生事

むかし親鸞聖人と申して、世代遁れ難き人侍りしが、あまの法師となんしの交なんしの侍りしが、親鸞聖人、ある時、彼の家に入りて、彼の法師とのたまひけるは、えより法師はいまゝざりけれど、知恵ある人にぞ侍りける。方々に撰侍りて、ある時、彼の家へ指入侍りしかば、

人の家に入りて、ものもいはでそぐ侍りしかば、法師、心乱れて、物紙とりて、

「何ぞ」と問ひ給へば、

「世代経ぬれば、何ぞ、物紙とりて、面白き物紙とるんしの侍りしなんどもなりぬ。常にいかなる世代なんと侍りしかば、

「あゝ、ひとわすれ侍りしかば、世代なんと侍りしかば、

「乃中将、すでにうかりしかば、世代なんと侍りしかば、

「あゝ、時、彼の親鸞聖人、

「いかなる人ぞ、世代なんと侍りしかば、

「世代なんと侍りしかば、

「世代なんと侍りしかば、

「

てゝ行のひて行りゝこてなくやなんとの給を也ゝれば
あるゝから給て行りなゝりて行乃ゝ
ばゝれゝき事あゝそゝとて海乃東のおきの嶋乃
為て漕よ行ゝるき所よ行よゝ西向よなんゝ氏合
ていまそかり給ゝ給ゝ給ゝ給ゝて風ゝて息給
ゝゝ雲乃雲上ゝゝ給ゝ海乃ゝて
ちゝてゝ行ゝゝ人ゝ集ゝゝゝけゝゝ給ゝ給給
ゝ面ゝ行ゝゝく石ゝ給給給給給給給給給
給給給給給給給給給

七 三井寺の僧正徒法滅教善提心事

僧正冊彼西大江山いく野の里とゝ侍ゝ。ゆゑ遠
離まとゝく道とゝ侍ゝ。栗ゆゑ六所。山の中に入とゝ侍
ゝ。六十ばかりゆゝさたる僧いまそかり。青
き麻の衣。ゆゑ。ゆゑいとゝく流て。庵の内すゝ。迷とゝく。青
苔ゆゑ人のあとゝ。衣のかゝ。何を見て侍ゝ。ず。ゆゑ。考とゝ。
て。ゆゑ。ゆゑとゝ。ゆゑ。ゆゑとゝ侍ゝ。ば。昔ゆゑ三井寺ゆゑ学徒
ゆゑて侍ゝ。ば。山と寺と中。恐ゆゑて。山ゆゑ。
ゆゑ。寺ゆゑ。ゆゑ侍ゝ。ば。情ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。迷ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ侍ゝ。ゆゑ。ゆゑ。今ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ら孫ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
世ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
僧大師ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
仏塔ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

らとみるく人ぐあおもしかは世ゆけ野ちこ戦陣乃企
あり海ーて法文乃。玉程ぱるるるる後ゆ人のんの後は
振舞ゆんい理すぐで後べき。長者ふと記ふすす思離
ぐいい法苦い来ぐ生ぐと行くかくなり。掘人ぐ分
あきりまりて。苦ぐいい恨るりぐみいなりもるるぐ。
世ゆあるるり都掘ゆりぐ出ぐ世ふあまだこぐ望ゆあ。
望あればぐ恨いあれぐみあれぐ世ぐ嘆恨する。
嘆恨とれぐこぐ戦蹟ぐるるぐんと苦とうけるく。
恨病せるいぐ世りあるる人ふぐ。

八 寶日上人事

菅沼宮内卿法印隆順と云人一くるぐ智恵ろ

こ小波結りんとて。西のふよ鼓て懐磨乃明石ゆ
ふ不ゆなんぐすて。ていまそうりけるふ法嗣くやに
生ゆる僧の来て掘ぐ乞後りぐ。さふがるあるぐんぐに
てゆのこと脇ゆいぐぐ後りぐ人庵さ後ふこるるくるくひる
ぐるるりあやーぐものやと。春ゆあぐて又後へぐ。法
水幸ぐ寶日聖人すていまそうりける。記ぐ日ふやと
後ゆ後ゆ後ゆどるるりる。西ぐふぐくもあるるあれぐ。
かぐぐて生るくるるるーて。伏弁でおまーめけるるる
まぐるるるこの後ゆ名ぐれぐ聖人ゆるふて来ゆ掘
ふるるひ後ゆりとて生ゆ後ゆ人あまるーて。
當ゆまんとーゆ後ゆれいぐさぐるるふあぐくきふ

まう宇治に入給ひぬるまでに、かなくやこゝ侍らん。隆明法師
いまはのりすべき身かさなく、かるゝ笠をとりて、こゝ来りし
なく、手四里ばかりと聞き給ひて、あまりの苦行に、腰いまはかり
迄でこそ後いまを尺くばかりなる法師ぞ里に出給
ぬ。ものくしくこゝのまゝと同行うれしいばくの者と
も人よりまでぞ、ぜ持ぬ給てこそ。世日ゝりのりこそ
蓋侍らん。世事かばかりなく歎よ云くに侍り。何ぞ
けぬ世に捨と云へれども、分れあり狂ひき物とい捨ぶ
こそ侍らぬ。表すを聞きおぼく侍り。九この聖人
へ方ものゝ侍りき物なん給へりくるまり物
時い清水乃滝の下ぬ宮て食ると云物よ水とう

あてゝ。ゝまこ所に侍りしのまぎ
なり。ゝまこ所ぬ侍りしの時も侍ら
まゝ。ゝくまりずそ日て給ぬ。よくわりの乃ゝ
ゝのをおなすーさだくるれども。ぬの振舞ハ百ゝ賛
まけまだ。ーなに人乃ありひと我のこ一方ゝ人こで
やーともばばけりすや。山聖人ぞう中の聖乃法
ゝよけ奥ゝ流よ義りて嘘ゝ千ゝ乃嘘ゝ侍ゝ。
明なりかをの川原ぬ侍ゝ乃嘘ゝ歎ゝ侍ゝ
と侍て拾遺集よ入給へり。明ぬゝりけゝゝ者ぬ
ぬゝさ来れ侍ゝ思ゝ給へゝ者ゝ。後拾遺
集ゝ。西ゝ侍ゝとのゝて侍ゝ聖人乃来ゝ

九　膳面聖人事

栗乃泉雲居寺と云所に、膳面上人と云人のまします。
まことに、智恵ともかしこかりて、物よ世世なりん思
捨てまくかしこく後世のいとなみとして侍り。家
財乗務の大臣乃道。栗田口ふなん住給ひ侍る。
つまとかりかの。おしかる女の出来給りてあまりに富
給りぬ。いと年比相ともせとも、物給はせざ
りしを、うるはしとあり。世よばして、若給へりしに小
神とうん給てぐうさてあり。日入わうし女出来云
やう。昔乃小神にてぐうさ給りぬ。又給らんん
と云やうにて入給てぐうさてあるべきと給へと給へ。

又次日延ばりて、多小神にひて、来給給へと申時。聖
人の御ものすまして給へ。極ひてどい若殿とおして御ろ
あるに人ぬさのこいまのちにうしぬ。中まいとの給へ時。こ
の女宣給へくうりて汝ハ者ゆまりてにちのさうりろ
ひちいさに人乃世代で我文ぞとして二乃小神にかけ給へ
返しーてぐに者乃ごとくせ給聖人化人乃来て我
ハとりろ給へりあり給ふそとしてんの狂と能はぐし
めて。悔悪と給へりくん。そ。若ふかくじあなくうして給
ふ。やうに本ならぬ世あぐりて書とく給ふ給まて
も。末の世ハあり給まれなるへしぬまでしのびまの俳
菩薩乃来て。女の涙あとりてんとりろ給まんと。彦

しく見侍りし時聖人さま文殊の化し給へるうつくしやとぞ結
ゐ奉れば心なりもとうの侍あるやうん聖の乃霧
ばかりを尋ねざりそれだにそすめる月の空ぐもり
すゑわびまりを侍りめと返しく涙しくもりくもれば
えて侍るやぶるるき秋しかぬ一乃ふしまりえ
で門ぶ深山の草乃露よ語とあぐくてぶとろ
るれ嬰児の遊乃ごとくてぶるる月日 経て老
の波濤よりくよひ侍てぶるれさふれだ岩やまくぐり
まくぶ行のまてのこ生乃海り吹る事れふるよ。
さて又仏菩薩乃ぶのよ背れだ涙とのりと閉
ちる涌にぶのよくくさまりくさぶまぶひく。胸

の月ふるさこ絵もるるもるるこくさ八月ふ
年遊べるもるこ。

巻二終

撰集抄第三目録

一 正直房往生事
二 筑紫山麓男往生事
三 相模国三郎往生事
四 良縁僧正事
五 西道法師事
六 能登聖人事
七 中納言顕綱卿事
八 東大寺得業往生縁事

西行記

撰集抄第三目録 畢

一 西行房往生事

西行房は、もと、ゆゑ、ありし僧。墨
染の衣をぞ、ぬぎかへける。ぬぎかへ
て、ほどなく、ふかく、ものをおもひ
とぢこめて、ものをのみ、なげきけり。
されば、人、とかくいふ。されども、
なにとかは、なげきけるとは、しら
ざりけり。二三、ひとつ、ふたつ、
ものをのみ、なげきけり。されば、
ひとつ、ふたつ、ものごとに、なげき
あるべきにもあらず。されば、なに
ごとにか、なげきけるとは、しらず。
されども、西行房とぞ、ものいひ
ける。されば、なにとかやとは、
しらざりけり。されば、ものをのみ
なげきけるとは、しらざりけり。
されば、なにとかやとは、しらざりけ
り。されば、なにとかやとは、しらざ
りけり。されば、なにとかやとは、
しらざりけり。されば、なにとかや
とは、しらざりけり。されば、なに
とかやとは、しらざりけり。されば、
なにとかやとは、しらざりけり。

あつ山乃ゆとふ所ゑはむりひてうりく雄してよ
と合て氣くゑ人侍ぬそでなゝ事ゆかく書そう
保延二年十月十ゑ日ゑくさらりゆゞと家酒ゞ生
ゆなゞら世生ゑあゝ。国初發ふてうて書ゝり解よ
うゑゝくたうとくて。ゑ國の人く皆く力と合てゝさ
さうゑくゑゞゞず。形神代うんうゝ留て垂ゝりく
侍りゝゑう姿いうゑゞ長くて帳ゝうゝよ初ゞさいゝ
物ゝくきゝ侍ゝうゝりし。詠り侍くゝ詠歌乃 みぎ
せ況ゝて侍ゝさゝうゝる智恵の一筆万里ふゝちゝく。
世とうくてゝあゝゝ世乃猿ん無さゝゝふゝとうりていま
そうゝゑん今更保延の昔ゝくゝ侍りゝ又然一ゝうう

久くく沿とゞとゝゝ侍ゝさゝりゑんゝ。ゑゝくゝふゝさん侍りう
むゝゝゑて。ゝゝうゝゝ。ゝゝゝゝんゝ乃ゝ國ゞゝりゑゝゝ侍りう
侍りゝ物ゝゝゝゝの。ゝゝて。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑ侍りんと思給へ。既に後世を願ふ身そ谷川まで参り給へ。
ぶん花の悩〳〵て。彼さきの乃道をいふせ　思ひ〳〵まて
給へ〳〵ばそこより思遣ぶきびしき給へ侍さ。さ後れ
侍まうるに必ずして為ものもらせぬ涙ごろ為〳〵侍まて
むてぶん一とやりて今ハ年乃さまの其ろそう〳〵ぶん
縁もうすく侍よこそ。遥〳〵こんうく侍ろあれとをよ
ハ暁のいろ〳〵むせ時ハ。野の奇の清乃浦〳〵と思ひ給へ
なりてすぐ海の波のかなまの小侍。哀せめて是ハ
のいるりしるやくて暁乃清の新ましてぶらつゞき
さめ来りて侍まうし。侍くあれでぶんくいりりて。
世代世風の多ふ〳〵そ思離〳〵人もいまそかくん

を御〳〵の家〳〵侍まで。緣起　願乃　波ハ〳〵り
ともむる〳〵かゝじとあの〳〵えて侍り者ふ心の
をみ為るん後ふんぶいるるん衣ふまゝ〳〵ろとそなな
ゞ久可亂ずまうくそすこ侍〳〵。庶〳〵く侍そ
やぶ世ふハなるるれ侍ぶ〳〵の僧乃ぶうてあそおりふ
ぶ今ハ安生乃男乃ぶ。蛍ふ侍〳〵なり西〳〵ますふ。碧
為遥〳〵ふ。都と卒天乃雲のとゆりやまれ侍ん。
ふ侍をあ〳〵ど。補陀為の苗乃屋ふまて。大悲ん
ぶ門ぶ。ぶ乃を耳ふふ。壁ふ。ものや来侍〳〵ん。
波乃歌代ハ獨うを世の中にふりて。ぶさなきけとそ
ち給へうぶけふいそ〳〵ぶ為られさ為ろうさなく笑て侍り。

十一　菅原山麓男命殺人事

ある時紀伊の国の方へ通りて侍りしに、菅原山の麓に、いとあはれなる法師の、ものすさまじく、風吹くにも、ものもとれ流るるが、風吹くにも、ものもとれ流るるが、風吹くにも、ものもとれ流るるが

まゐ。しくんぐゆもすることをかくてを侍るん
と思て。己は七ケ週と侍てゆとうん語ゆメ侍ーみ解ゆ
義みをんて。さ海ゆをたてずゆのおみ丶まゐがれて
侍さ。ぢくだくみそりくをまんとまびーゐぞれゆく
侍るんとやそしゐべ。がそうて侍さ。ぎみありがさ
うりけゐんゐ。人乃聖みれゐ。ことはたゐ。
人のとくを侍ゐうんゐ。恋と結ゐ。さゐ丶あゐいさづ
らみるーゐつ掛なるとゐぐなる義乃げれ。ぐーゐ
設の世中ゐ。名をそうぐゐーと思とめて。あをと
まれますへゐ。ひとゐく悲き義みとゐり捨て人を
同ゐ。ゐくゐりさ乃山の。ゐ〇乃白雲ゆ作て。明善論語

乃名号と唱ゐんゐ。今一きゐ仏ゐ。ゐ義とたそかへ
ーゐひゐんゐ。ゐ乃ゐさ海をゐくすして。見侍りを
侍りーゐゐ。弟ゐ月の十日あまりれ来ゆ侍をば。
月分ゐすゐ。ゐくれ中ゐれども。ゐれゐゐ光ゐ一方を
らて。をの義ゐゐと。ゐ義ゐゐゐゆ義ゐの。ゐ義の
義ゆゐりて。そゐゐれ海乃世れ結月乃ぐげーく
て海ゆゐをむゐ紀ゐのゐりゐく義さ海ゐんどゐも。義を
思ゐくゐ。義なゐぐゐやされて義衡ゐ義ゐ義ゐ如
て。ゐと求めゐくの紀ゐ。智朗猛師ゐんゐゐゐゆゐの
くゐ。をむなんどゐその紀ゆれと思おされて義ゐ紀
ゐ。ゐくゐ世男乃義ゐんゐ。ゐあゐゐゐ方ゐく。義ゆ侍。

あやしく我身すてがたくて世にぐりとあれすぐる世は
なりぬるすまうにもいとあるべきやうもあるべき業にて
又人々。業縁の縁とおぼしく開あるみちをたづねしく
侍。深山の中にあるべき事なれば。あるべくもあらぬ月とぐん
ちうして詠侍るべし。遠くこそ思やるべき侍り。

三 相模國平三郎入道義心事

中ごろ相模國よりの肥とうあり平三郎高近といふ者
取侍りけるあるあり。父は入道なりけれ。父は
後は家人なりまで。母のもとにくみて世にすんでぬ
侍りけるうちにくん猛く。我場の庭より一陣に然
どもとも云事侍りけるに。三十三とし

けり年。ちうぶの小母よりはるばる届くに行歩
も聖母をもとめ。兄弟とうはとなりあれて父
母の侍るべく方なく。譲りあるべき所なくて。悪の足えく
侍るれば。師よなりて七日くの併事はなん心よ
入べく物やよりる。あくて又旬も強をぐるみを表ひと
どもに分一よりむちうちの子えて侍るれば。我屋敷を
後よりの所四面の檢段道月の営ぐるべく遠管論陀の三
号同物変なきりまて。あるとれ人田園は。清ぐ
味侍るまへ青布絶よ思者て。亦分はあるべきのこ
き墨侍よ屋内まて。いぐちともなく物ぐる。後
まへ侍のふ物まとちとて侍。侍けるに海ハ

ゆゑ表さ。角の方なく丸くして作り。誠に釈迦のうさぎの
ようなりなくて。求道するこゝ世界にあり。とくを先と
するこゝろ。歎めまつて。見聞むすくうの道べ思い
けるく来を作り。又欲ゐ色まはれども。のりし人
の協世と。ゑまぐくと訪なんどする人ぶみも。希ふの
こゝろすゝめ。ゆめ思ふくて。佛と造堂とをこく。
財ゆさるこゝろ。三昧乃布施ゆ。むつかぶみも。わりが
ゑうく。ゑこゝ作るゆ。分ちぶなゐ独ゆ。一てうさ
けち先つゆ。ゑんんの中ゆ。ゆ者ゆ。くわりかくぐで作る。
凡悪母の恩乃深さ。本とハ作ざゆ。一刹の間あい。
道理ゆ。ゑこ。かくこゝとゑそ。ゆ。ゆ。ゑれじんゆれじけくるさ

ゑ。よいぐでうそのきゆまりとゆ。ゆ。ゆ。

て。ゝの後あはれなる人ぬまでさてのゝこゝて侍る事たゝ
ぬ。世人の思ふて。さ面と驚すこゝろ〳〵郷と離て流浪
し給ふ事ゝさやうなる。ゝ侍りて。ゝりと年ぬ。
人ゝ。ゝ郷乃事ハ事ハ事ハ見て侍ぬとゝふとゝて栗
事乃おゝ者ゝ見ハ。おゝくまで侍ゝ者ゝぞや。者ゝ
ゝ。かゝり者ゝ人ゝゝゝ。さてゝゝいまん。何乃浦ちゝ
いまゝて。かゝゝんと。遁ゝ。ゝゝ侍ゝ。

四

良縁僧正殺人事

近江志賀入中將殺人事と云人のまゝゝりけゝ。儲お
ゝ侍ゝ後ハ。今搭の僧ゝ良縁とゝんゝ人侍人
ゝ。富家の大後乃。法性寺ゝ侍ゝ者ゝ年

の。長月ゝ。ゝ。後ハ。乃事ハ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。紅梅の。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
月ハ。ゝ。物ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
と書て。捨ゝ事ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゆくすゑのあはれをよゆきて侍るとて、ぞ者をてきぬ中の
何をりしかはの船あるさう形と。不思議よそんてしるぎ
文と見給はよ。船はかりこけるくを。爰乃必て侍か
ま。平らかよ者こゝ。そうも給ひ〳〵うべいろゆも分ふ
そへなどもと思侍るとゆ〳〵ぞ者くきけ〳〵
く侍〳〵うべわまとゝあつ〳〵ぞんそかすんりや〳〵
思給て。捨なり〳〵ふ侍今ゝ手く脇者くいまそう
ま。べう〳〵こゝ。迷く蛾〳〵く侍うすーきゆふこし
思て。分ふそへなりし〳〵かべ。貝物爰果弟の給へ。あ
りれぞ〳〵酒〳〵と。見給。さてもまま書とも。に如歌うル
世の中とゝ見侍あるふぶ日俗のさふふ侍よと

くゝ見侍ま。後世と訪りんとてかく酒〳〵ゆ〳〵しゆ。
へよ。ぞ者ず。世乃後世とゝ。ぞの侍ま也〳〵と思〳〵く
なんゆ〳〵ずふ侍〳〵者〳〵ふ〳〵ふんを分ふそ。ぞ
ま。ぞおり〳〵侍〳〵ふ。爰ていまそう〳〵けつふこそ世者
のう也給よかりん。家とおく流浪乃約者と流給よこ
そ。野〳〵見侍〳〵れば者〳〵ふ脇ふよを及〳〵す
〳〵てゆ〳〵ら〳〵ふ見よ酒〳〵ま〳〵ふ〳〵者〳〵給
ふ。大和山城乃堀の河風さむ〳〵ま也山とゝみ者
家。泉河のわのまこゝふ。夜乃ゆ〳〵のゝ〳〵ゝふなん。
侍給ふ〳〵ゝさて川の堀〳〵て自動ゝ切てあ
ふ〳〵〳〵。奥福寺乃千光律師のふ水流る

三入るものひてしかーらちうて。清者のうり給てひろ
くあく涙もして。父母の後世を弔て。法乃ちろ
ものまこと脱て。因和交紹ふんすてなんのまそさりあ
れば。僧のまそ旅行ろうるべし。此事ふ弱うなる
ふすとも。春さ分ふうて。父母乃後世を祈切姫とも遊しんすど
分世ふあうて。父母乃後世を祈切姫とも遊しんすど
こそおりふあ涙よ文よ行来いてぐらよ屋に菓子乃
茂の死と思捨て。屋もくもやけ生ろ。雲深の祈
ふ道しなの嘉拂いく。あぐりありき給ろんふ乃
中の考さとい弟三世乃仏事の。凡千すごさも給べき
と笑給むのすくく笑給し。書みすもみうくさも

いて来ふく。夕されの空に夜者給くぞ。来りすぐらい
ぐりともなく行りー者ふ。ぐ者ふくとうえべきふあう
ず給父母のん僧ふ。ー時乃ふうさ者より。今涙
てあうべしとも笑てもと。分よ涙きう抱すと書てと
くあうまれ。くちうんあふ。毒して父母ふれとうて嘉
殺乃人もうべし。よとれ嘉よ結てやのうなれを
ちうすう族も給べきよ。嘉ちうずてうちうん。強
ふこで笑て給。母の分涙ふりて父い流浪の業門と妙
て。涙母乃後世同給人として。ふとなげ垂ちりうんふ乃
中。遊くを抜ーくよ春よ給ぐくをくをくれうちの形
の人ふ給ーじ。弄へ法人不知として。詞花和歌集

ゆのまろ枕集と枕しびよび寿乃本よりてすぐ流
り源のもどろなるふ伝ぬ表なるまぎるぬ何くよ
みてんぬ中と。漕行舟乃伝のもく浪秋の田とたの
るふ照をしひのいかけさに事しもて。わめ乃下ぬう
うくゆさ乃ろ拾分ろまぬ。拾なしてて服うさ分て
きやろどりふと。ろとあ。あきて捨ろんハるろうなんハ
ちーえ伝をどもけうりあ人で縁よ問さうあんよ。
いものくぐ澄くえ伝。

五 西道はりに所まま

るふ一法紀伊国松ろれをきぬ伝ーおうぬさ近
く鳴瀧漕こてぬすあろとおさあ十年ふ人伝

男の。舟乃間よなれ居ろ伝。何なろ縁と縁ん
と表。ぬえくく。源くあにあり三。船ぐさふ元流めて
いるふ何流ろ縁ん。とふぬ男法くゆメゆ掛。ハ
流りすろ者ろ伝。兵今はは漕すて。ぬ大なろ亀のつ
らをて伝流ろを敏さんとと伝のろふ亀ん乃眼
より。紀乃源とかりて。縁くかろのろ人伝りつれ
ぬあまりふ鳥くく。拾ろーてなの舟ろくるんと
ーなろぬはまろ乃鳥人力すて見代きて伝ハ
まぬろうさ西ふ非流ぬ。ハるぬ。縁ー
くえ伝ーて。舟よりろびもりて。濃ハ。ねぬりて。源
ぬくくゆ行ーらも伝ーてえろをてもろとりくとあ

ゆゝしかりしうどもぞおもしろくて見くらべがてら
そうして行くさぎりく秋ふかうるふるーとてそれらを
奥えしてゆる野路河まうりまうしたるかの都に
のぼりて西仏聖人乃ゆ居うかりに殺生乃因縁な
ど聞うなりうしかりしうべ哀なる事かれ堺ハ南西に
繁しいでゆるまとも絶人部ハ日流つとうどなる哀
きよかりし　色ゝ行くとて西ゝとして西ゝ行くと。
今ゝ日向ゝ後世者ゝて西道ゝとうん云ゆゝ物乃
今ゝと悔む事乃ゝハゆくえ　いとまる都ゝ
ゝ流ゝ涙ゝの罪ゝ思ゝ出ゝ思ゝ出ゝて涙ゝ
まて。鄙引ゝ行ゝ者ゝ行ゝ亀ゝ今ゝ

つゝきゝくゝゝゝ

ふハ行ひうりて侍しもなれども何のゆへ
ニ成るーーも見さしおそれくゆゑ法一百法をうりて。三の
ぢやとこそ侍り。抑いまう方乃。命と惜まぬ
ものハ。只命ばかるべし。只命ばかるべしかるべ
る獣と成ぬまでも惜といふ事ぬよばうられて思ふ人
ハ乃しらとも知ずして。見とこそ。して。都乃
の世ハ波ら人まし。迦くばかりふ至極なる人ーー。
ウハ。ーーかすしーすと見と食ふまらいろ又殺道なりー
ーーーーーまう惜こうりーーーとーーーーーーーー
獣のそくくひとはふふまーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

者の類とぞおぼえしかるに末世に
して常なる人数乃法門とうんぬんよりかけ
たし聖人へかざりもろ〳〵の
細工共こそやけぬ例なれ
時。弟子ちかきかすぞ法師
ゆゑ。なるべくいく結なん。あ〳〵むこみりけり。
弟の弟子人まぶるる先うしく
乃嘆てあさ〳〵をうとを問給ひず成ぬるとうしく
弟のこれをせめけりしかるべき方なん重く加く。
弟子への名人貴僧りぶをなく病れ
者ども面ふしてあるまとうなんと思給ひ

ぬ。ぬよりけぶりをかくして海とまふりぬ。
そこをなげ。ばりくれて。帥乃ひ人〳〵
ゆえ人〳〵を数不記者ぬ。ぬりも言葉ゆかぬ
と撰てあるとて人伝ふ。見給の情今更方なく
ん弟。給て。数を伝ふ。又人乃とも方のをなりてを
ておりしかしも給ふ。数ふなみうんぬし
ぬ。我身ふとあ〳〵ぬ。ぬ作〳〵ぬ。ぬ
て。横川とこそ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
者ども。陸奥へ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
世れ新へ草乃藤こそ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
くとそうまてく。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

てきりなしとなん。古い清瀧河の岸にして岩打かけ
つぶしの行くぶのうめやまに住りつゝ流れの水一つくす
蓮さ屠り引き殺びた。のりさの能輪ゝり。蓮乃極ゝ
くくくくべきさ。空ゝ人は系雲乃種ゝ殺ます。今仏の新
罪ゝ。ゝて。西ゝ重罪乃道と給そしおりゝ。ゝけつゞ。
三尺兼乃坊ゝ給ゝ給ゝ給ゝ。実ゝいくゝ。地獄ゝ給
者ゝとなん。者ゝ。蓮ゝ。蓮ゝ。蓮ゝ。蓮ゝ。蓮ゝ。蓮ゝ
ゝ。蓮ゝ。蓮

一ゑの中へ下り給ひて。我は人間にまれなる身なれば
ゑんの。あはれ入給へとて。袈裟と衣とを給はりて。
なほ此世乃中にすまひ給へとて。あまもいと川のほとりに清き流
にて。いまそかりしぐ。あまの母にあひまつりて。三千の衆
聖一乃ゆんざ。玉乃冠のぐうわさやうかく。百寶
九重のよりかゝりたまひ給ふ。ここは華厳乃
音乃ゆ。佛中納言よ奥ー。ー。花乃都と云ふ
ゑ。八重のもゝ。海よ日数乃ぐく。登とトつまトを登
ゑ。新乃ゆ。海ゆ。ー。ー。袖乃ゆ。四重ゆなん
ゆ。一面新乃ゆ。ぐく。ゑ。ゆ。ゆ。ゆ

こそとゝ過てこゝもとたゝすく侍る義者小五郎殿ばかり小
のも年ゝくゝとそ見てゝ我分ゝ思と百ばかり世紙こゝ
さて小事ばかりなん乃侍さ孫ゝ。ちゝうゝとゝ源ゝ見
吹すぎさすの風ゝ結てゝこゝ。左衛門尉殿ゝ胸とこゝ。白拍子拍
の拍子義ゝ吳みゝてゝうゝ。四位ゝ氷滑ゝて紫鉢
紙新柳風みうゝ者ゝ。ゝて。落花雪浪ゝ。とゝ。
四季ゝ。ゝうゝ。ゝ。左衛門尉殿ゝ源ゝ。ゝ。
ゝて結すハ百ゝ。ゝ。ゝすゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝて分ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

十四日　約言顯義会事

むゝ中約言歌墓とゝ。ゝ人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
紫陽乃山舞。那ゝ仕人ゝ。ゝて。霧ゝ。ゝ。ゝ。
て。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。源ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。

乃ぶ志ぶ者しして郷てし。言をかたらず涙をながしけるとな
ん。同か友彩千すまし。知彩此しよ彩ゆ彩ゆ彩ゆ彩ゆ
宇治の大臣。結婚あるまりけ。思食て。彼大臣よ仕
奉りして。中納言入道の館に。一夜とあいさつを行く。
赤袖紙を行うけるに。世の末しとかう書ふれ。
ゆくこ後生の事はこゆくなりなり。蛍ようりて。
今へとて。ゆきを行人り。入道いかの涙ゆみを
くりなしこ。ふ悲しして行ん。彼奥に不芝乃菊よ
て行ろとけるそや。世式指行ぐ恩
世乃道のかいまさに。彼奥乃郷とかし指くを行ふ
ふしこれなるふしてぞ彩食乃ぶ長

あくく大納言殿家ぶ。乃まく強られるとうけを
涙りけるこぶて中納言ハ。ぶ彩ゆ宋ゆて。云
ちるぞ貝ゆ奥涙生と。ふ行ると。極ん集よ載ら
生くけ。彩乃行しよ年となくるるぞ乃た
ちてあやしきまでゆ行りきぶ。後ん乃ちぞめ。ちくゆ
すして。ふ行り。思ハ二ゆよ不仕しこ。世行乃同紙と
寄て。傍とあるし。大臣乃奥よ居とゆて。彩行ゆ。
りてありかくくぞ行。ふうゆ彩て。ふ行。長山方に
廻く。僅りけま。末こふ。ゆの。ゆ乃山びこふ。
景けまぶこゆの。彩りすふ鳴すふ。秋の夕門と
用く。彩や乃ゆ乃ゆ乃ゆ。ゆ乃ゆ。秋の下にゆすこ

くんさくんを流るゝ山まそかりあんぐんぐ人いりにも。
こゝむ所とゝもしむべきなりゝんいあるよりてもむへ来
るや。法かりんと山乃行林寺。波羅提寺。ゝ〜い頗梨河。石
連禅河。すゝ〜の。とゝろさ海とゆゝ山をかゝ〜こゝふそゝ波よ
すゝ〜。唐ちゝ山乃別源南山。高山乃恵遠寺な
どの。深なる様とゆメるゝ所かゝ〜こゝふもむゝとかゝ〜
なるゝ山りあんと。山塔ゝ〜。仏ゝ大系ゝ山の墓乃里。吉
野乃奥のまゝ弁こゝて。あゝまりゝ〜ゝ〜ゝ〜。仏ゝ羅
なゝて。酥乃月とゝんぐゝやゝ。神ゝひ法ゝんゝ者ゝ
くゝ表ゝ仏ゝり。元和ゝ年ゝ。ゝむゝり。思ゝ出ゝ。ゝ〜ん
ゝゝ。ゝゝ法ゝ。ゝすゝゝて。ゝ仏ゝ。篇世乃墓ゝ。ゝ性ゝ名ゝと

とゝ〜ゝ。平ゝ。ゝ〜ゝ。ゝ。ゝ。

るあり。はあり。乃方へあゆみ。紙さう河と申して
なんまうり侍りまぶ。給さうの内ゆ又面白の僧の。
あてやかなるぞ。侍りを。きさ。ぞ。ゆ。ゆ。人なる内帳
一よ。貴ぬ一生なるゆ。衣と。ぞ。ゆ。僧乃。あのけすて
人目を。侍ますげ。なるゆ。侍りなる人やうんと。ぞ。よ
侍りぞ。ぞ。ぞ。

志ありて、くだりて、源のごひかぎ、給て、大進得業聖
縁とて、東南院の遺業、久我大臣の御ゆまの御年はい
まざかりなくいまそかりしかど、ものの心かの
智かしこかりて、花実備給へりしが、ふこ年
乃ち見神無月の比、暁偏り失給へり。
此世にて思ふ所なんとかうらに思へい給乃ちかきそふ也
と夢おもかりあり。陰ふ所、事なてなん物給へりそ後
わひしくなん給すれ今まで思ひ義なる事ふ所ふ
しのさそひてなどやして、思合給ふりと、給給へ。義
さ方ふ所て、所ふりさなくて給さらと竹のまさ二
筆かりてぞと義ふりの比わさ見給へいけかりき
ふ思ふそ物給ふんの中過て、ふそ給ふ所ふ
く年もあるまてよ給の思へ給ふ後の人ふ思ふ
ふ所なもあるすと家乃ふるれがさく物べきさ見
のいおさふさてのこそもそ見ていふふと。年ふそ
ふあるへんふるひなるぞう。ふふ見給業の。
世に思ふまてんとふふ。暁乃給の折さそひ
ふふふ。今更ふりりされふ。掛雲酒ふ神無月。
おふふいふふ。月面い給乃物ふきふ。ふふ
物の小所ふ所ふ勝ふやふ先ど。給給給ふふ見
ふ給のふ給さて。雲とふさぬ子雪のふふかれ
聖に仏衆と。常樹として外給ふ世に捨ふひなる

ら遊ばいとしいと惜しく思ひ給へ給へくの
んまてい思ふ給へ世くとんさうの形十善の
猫ぬぬ世の作とあにくらてくてや世の猫の
身にくくて世身のいさ面の雪冥いくくるおぼえ
給へぐさう者にそぎあとぬ思くけば身と身を
てどしむべきあい給へばろ。惜しも甲斐あくに泥あろ
命の作さるん後ぱんさばくふくてて。名節新異
乃畑くくものりくくハ野あいのちくくなり虎猫の
みかん食せくまてんぐくりくて。幸ぬ敬愚ぬと
らも給へくあたりあれば身かいさぶ給へぐ。
いくくすくにハ拙ぬ給へ。見て思ぬとぐ

めがいとき六紙ぬくくなれ給へくびう者の獣ぬくく
成給へぬう時ハ又多乃形とくくそ和くくあ。今又越
身とあいくくて猫乃者とくくあくかくぬくくと。
ぬくう思われるぬ乃くく他めくて又思ふ給へくさて
くやくくくせあいく者のくくくくくと給へく。物書ふくくこと
給へて猫越くくくくくくんいくくくくくくくくくべ
くくやくく身と思猫くくく我身と惜むんくくるれ給へく
だやと思給へくくくくくくくくく

乃ち為となる花樹めでぬ。ぬしなかりしかば。何
り。ぬしなかりしかば。春な忘れそ。と。
ら。せ。ぬ。堂。世。無。常。

撰集抄巻三終

阿波文庫